修士論文要旨

ヨーロッパ中世前期における空間と移動

別府大学大学院　文学研究科　歴史学専攻
博士前期課程　M1511001 尾籠 恭平

20世紀後半における中世初期社会経済史はそれまで主流であったピレンヌ・テーゼを批判し、この時代を成長の時代として捉えている。その中で宮松浩憲によって移動と距離の問題が打ち出されることとなった(宮松:2011)。これを受けて、移動を行う範囲である空間までを対象として、3つの空間と移動を検討した。国王の移動たる巡幸を見ることで政治的支配的空間を第1章で検討した。第2章では王領地の空間構造を検討した後に修道院の空間と対比を行った。第3章では主にワインを対象に流通空間を検討した。

シャルルマーニュの巡幸は極めて政治的な意図でもって、彼以前の時期とは異なりソワソン地方から東方へとその重心を移すこととなった。しかしその基本はライン河以西であり、冬季滞在王宮もザクセン遠征による2度を除きライン川以西に位置している。巡幸はその間を中心として動き、それがシャルルマーニュの排他的政治空間であり、御料地の贈与あるいはザクセンやイタリアでの新たなる御料地の獲得や植民市の形成はカロリング王国の拡張を意味するものであっても、重心がいまだ西フランクに存在したことを示している。実際ピピン3世からシャルルマーニュまでにおける御料地の贈与は極めて少数であるか、この空間の外に位置していた。しかし、ルイ敬虔帝は再度重心をソワソン地方に移すも、彼の治世から御料地の浪費が始まり、カロリング王権の政治的空間は崩壊した。

カロリング朝の軍隊は騎兵制度を取り入れており、彼らの移動は陸路が中心であった。御料地においても修道院所領においても、その中心地から重要拠点は半径20キロ以内であることが確認できた。それが人々の生活拠点であるとすれば、宮松の説を支持するものであろう。そしてこれらは排他的な空間を組織していた。

フランク王国におけるワイン流通は文献的にも考古学的にも北側とイタリアを中心に残されている。北側における流通の中心空間は北海であり、フランク側の主要港はドレスタットとカントヴィックであった。前者はライン川の河口に位置していた。そして各修道院はこの河の近隣に所領を有しており運搬賦役を介して集積地へと送られていた。その拠点からライン川を下りワインはブリテン

島やデンマークへと輸出されていった。このことは陶器によっても特徴づけられている。カロリング期の主要な陶器であるマイエン陶器やバドルフ陶器はライン河に近い拠点で生産されていた。そしてこれらの陶器の流通圏は数百キロにも及ぶ極めて広大な範囲であり、カロリング期の外部世界との活発な交換活動を示している。